

## チャーター研究の動向 —国際学会に出席して—<sup>1</sup>

浜 口 恵 子

「新チャーター学会」は1978年度に設立されて以来、2年ごとに英語圏を中心に開催され、1986年度第5回大会はイギリスのヨーク、筆者が出席した1988年度第6回大会はカナダのヴァンクーヴァ、1990年度第7回大会はイギリスのカンタベリが開催地である。いずれ日本でとの声もある。登録会員数は約600名程で、その国籍は、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ドイツ、イタリア、ベルギー、南アイルランド、デンマーク、フランス、イスラエル、韓国、南アフリカ、スペイン、スイス、ソ連、日本と、異文化世界の寄り集りと言える程、非常に国際色豊かなメンバーにより構成された学会である。*The Chaucer News Letter* と共に学会誌 *Studies in the Age of Chaucer (SAC)* も年に1、2度毎年発行され、研究論文、講演、書評などと共に、日本も含めた世界中の研究業績を網羅した文献目録が掲載されている。

第6回ヴァンクーヴァ大会は、1988年8月9日から13日までの5日間、UBCの会場で、ありとあらゆるテーマの分科会がぎっしり組まれ、司会者や発表者として128名程が参加し、中でも女性の活躍が目立った。そのプログラムの扱う範囲の広さ、多彩さは驚嘆を禁じえない。その為、興味のあるテーマの分科会が、同じ時間帯に幾つも重って残念な思いもした。この過密とも思える研究部会のスケジュールの中に、コーヒー・ブレイクやワインを片手にの懇談の時間、中世音楽のコンサート、サーモンバーベキュー野外パーティ、日帰り旅行など、一息つける楽しい催しも織り込まれ、緊張と緩和、チャーターの言葉、“*ernest and game*”のほどよく調和のとれた学会であった。

この学会全体の概要やプログラム全体の具体的内容については、既に下笠徳次氏により緻密な資料を配布しての素晴らしい報告が、1989年5月6日、神戸市外国語大学での、日本中世英語英文学会西支部第5回例会でなされており、その結果は *Studies in Medieval English Language and Literature* (東京：日本中世英語英文学会編) No. 4 にも要約されているので、そちらに譲るとして、筆者は、多分日本人(出席者10名程)では、筆者ぐらいしか出席しなかったと思われる20名程の少人数の分科会、主にファブリオ、言葉遊び、フェミニスト批評、結婚のテーマから印象に残った所のみ、筆者のフィルターを通してお伝えしたい。

『中世文学理論とその限界』と題するテーマで、Glending Olson は「肉体化された笑い：チオーサーのファブリオ感」(“Embodied Laughter: Chaucer’s Sense of Fabliau”) の発表でファブリオの属するジャンルについて取りあげた。

チオーサーのファブリオは、口誦文学であることから、大道芸人や旅芸人の芸、肉体を通して演じられ、観る者、聴く者に口を大きくあけさせ笑いを引き起こす、そしてそれは受け手に肉体の快感を与えるという意味で、「肉体化されたパフォーマンス」のジャンルに入ると氏は考える。

このような「肉体化された笑いの文学」、ファブリオをチオーサーは、作中の巡礼達の反応を示すことで、そうでないジャンルの話とはっきり対照させている。

たとえば、エミリ姫を恋し、馬上槍試合で戦う二人の若者アルシータとパラモンの恋の争奪戦を織り込んだ中世騎士物語、「騎士の話」に対する巡礼達の反応は、「老いも若きもこれは気高い話だ、記憶しておく値うちがある」と口々に誉めそやす。その後、騎士の話に粉屋が挑戦する。オックスフォードの学生ニコラスによるノアの洪水の予言で三つの吊り桶を洪水に備えて作った年寄りの大工ジョンが桶の中で洪水待機中、その若い妻アリスンとニコラスは大工ジョンのベッドでお楽しみ、その間に、窓辺に教区書記のアブ

ソロンが、にせものの宮廷風愛のマナーで求愛に来てキスを求め、窓にお尻を突き出したアリスンに「間違った場所」の口づけをしてしまい、その仕返しに焼ごてを用意して、今度はお尻を出して放屁したニコラスが大火傷、「あつい、水！」に大工ジョンは洪水の到来と、桶の吊り綱を切り、床に落ちる話をする。この粉屋の話に対する巡礼達の反応は、「誰も彼も笑い興じた」と表わされている。真面目なお話に対峙させた笑話という配列は、チャーサーの“*ernest and game*”の反応の妙を見事に対照的に示している。

「騎士の話」のように、賢い人の、為になるお話は記憶に残るのに、粉屋のような愚かな者のばかばかしい冗談は記憶に残らない。これを Olson は、中世の心理学的分析から、中世の人々の考えを次のように述べる。賢い言葉や為になるお話を聴くと、新鮮で豊富な spirit は脳に入り、想像力、理性、記憶の三つの機能を示す細胞を順次活性化する段どりを通過する。ところが、ばかばかしい笑話を聴くと、spirit は、拡大されるが先程の三つの細胞は眠ったままなので、威勢のいい spirit は、いきなり顎の神経へとジャンプする。そして口を大きくあけさせて笑いを引き起こす。喜びの状態に起こる spirit の拡張は、肉体的快感を与えてくれる。

Olson は、チャーサーのファブリオと言えるジャンルのもは、巡礼達の肉体的快感を表わす反応や肉体のパフォーマンスという共通の signal を持つと定義する。

この粉屋の話の中で、大工ジョンが、オックスフォードの学生に妻を寝とられ嘲笑されたのを、大工を職業としていた荘園管理人が、自分へのあてつけとひがんで、爆笑の渦の中で一人腹を立て、粉屋に仕返しする話、つまり粉屋が粉を盗まれた上、ケンブリッジの学生二人に妻も娘も寝とられる話をする。

この話に対する巡礼の反応を、チャーサーは巡礼の一人、料理人の「荘園管理人の話に大喜び、すっかり面白がって、背中を叩きながら喋った」という描写で、文学上の喜びを体現させる。肉体の快感につられて、料理人も、

未完ではあるが、ふざけた笑話を企んで笑い出す。この粉屋対荘園管理人の巣試合は、托鉢修道士対教会裁判所召喚吏の形で引き継がれ巡礼達旅の一行を沸かせる。パースの女房が結婚談義と鼻天下で通した五回の結婚歴について話をした後、托鉢修道士が笑って、「長い前置きだね」とちょっかいを入れたことから、それに腹を立てた教会裁判所召喚吏との間に言い争いが始まり、托鉢修道士は皆を笑わせるために教会裁判所召喚吏のことを話そうと、また教会裁判所召喚吏も「乞食坊主の話なら二つか三つくらいやらかすぞ。きさまをとっちめてやる」と互いに相手をネタに冗談話を話す。托鉢修道士は「旅の慰めには冗談話が必要、教会裁判所召喚吏について面白い冗談話を語ろう」と聴き手の反応としての笑いを意識する。また、この二人の感情は肉体のパフォーマンスによって表わされる。托鉢修道士は「なんだか人を喰った調子で教会裁判所召喚吏を睨みつけ、托鉢修道士の話に、教会裁判所召喚吏は怒りにポプラの葉のように身体を震わせて」と敵意という感情が肉体化されている。

「船長の話」も「肉体の快感」という signal を持つ。船長は自分の話を「面白おかしいベルを鳴らして、一行の皆さんの目を覚ましてあげましょう」と言っている。この話の内容は、商人の妻が親類づきあいの修道士に借金を申し込み、その御礼に自分の肉体を提供する。一方、実は修道士はそのお金を商人から用立て、返済を催促されると「奥さんに返しておいた」と答える。商人はその妻にそのお金を返してもらったことを何故知らせなかったか小言をいうと、妻は「そのお金は普段うちに世話になっている御礼に下さったのかと思ひ、もう使ってしまった」と答え、自分の肉体でその負債を夫に払うことで折り合いをつける。このような肉体のパフォーマンスは、「商人の話」では練金術のような女の悪知恵の術を披露してみせるパフォーマンスとして引き継がれる。年寄りの騎士は六十歳にして初めて若いメイとの結婚に踏み切り、幸福の絶頂のさなかに目が見えなくなる。妻は若い騎士見習いと、老騎士の頭上の梨の木の上で抱きあう。その最中突然目があった老騎士は、下

から現場を目撃して泣き叫ぶ。その非難の叫びにメイは「これは目の治療には男と取組合をして見せるのが一番と聞いた故」と弁解して危機を逃がれる。

ファブリオという語をチヨースー自身が用いたわけではないのだが、このファブリオに属する文学を、肉体のための肉体の文学と解釈しており、この笑いを引き起こすパフォーマンスの抱腹絶倒のおかしさ、また限界や危険性も伝えようとしたと Olson は結ぶ。

このファブリオなる笑話には言葉遊びがふんだんに盛り込まれている。この言葉遊びを主題にした分科会で、翻訳の問題、単に言葉の意味の語呂合わせや遊びではなく幅広いコンテクストを通して広がってゆくゲームとしての言葉遊び、又そのような言葉遊びの発する卑猥さに抵抗を感じる現代の読者についての発表をかいつまんで報告する。

Juliette Dor は「チヨースーの言葉遊びをフランス語に翻訳して」(“Translating Chaucer’s Puns into French”) と題する発表で、言葉の形態と意味の両面を同じパターンで伝えるのは不可能、したがってあっさり捨ててしまおうか、まったく別のものに置きかえて、その意味内容を伝えるべきで、翻訳者は批評家の立場で臨み全体の内容を把握し、その語のその内容への貢献度を調べてから、捨てたり置きかえたりしなければならぬと述べる。

「言葉遊び」の中で、チヨースーは単に詩に色彩りを添えるため、同じ語、あるいは似た語、一部同じ語を繰り返し並べて使う語呂合わせを楽しんでいるが、この場合、あっさり遊びを無視するか、同じ遊びの効果を持つ他の文句に置きかえてしまうか、作品全体をみて選択すればすむ。

ところがチヨースーの言葉遊びには、曖昧性を帯びる、重層的な意味を内包するキーワードを使い、その作品の面白さを狙うテクニクがある。その場合、翻訳者は同様に曖昧性を持ち重層的な意味を内包する語を捜すのに苦勞する。たとえば“flour”という語は「花」(flower) と「小麦粉」(flour) の意味で「バースの女房の前口上」に出て来る。“The flour is goon”は「バースの女房の美貌の花の時代が過ぎ去った」という意味と、「大事な小麦粉は

もうなくなってしまった、後は売れるものといえど「穀物だけ」という二つの意味が同時に響きあう。フランス語の場合、*fleur* という語はその二重性を満たしてくれるので問題はない。特にラテン語やフランス語の借用語の場合、話は簡単だし、もともと近隣の国で共通の文化伝統を持っているので、粉屋の「黄金の指」、つまり小麦と穀物を振り分ける指と、不正を働いて黄金をかすめる指を表わすメタファなどは容易に理解できる。

ただ、うまく翻訳されても、それが通じないこともある。現にフランス語の「哲学者」という語は実は「錬金術師」という意味もあるのだが、知っている人はあまりいない。

フランス語で翻訳不可能な例をあげると、「商人の話」の中の「独身者はもろい地盤に家を建て、病いの時はそのもろさを通感する」のこのもろさに“brotel” “brotelness” と語呂合わせを工夫しているが、実は、この語には“brothel” という h をはさんだ音声的に似た語、「売春宿」という語をも背後から灰めかしているのだが、フランス語でその言葉遊びを伝えるのは不可能だと Dor は述べる。

最後に彼女は、研究者各自が発掘した言葉遊びを集めて、チヨースーのテキストに載せてゆくようにすれば、チヨースーと同時代の言葉遊びに熟達した聴衆と同じ笑いを共有できるのではと提案する。

Chauncey Wood は、この言葉遊びを、ただ駄洒落や語呂合わせだけでなく、コンテキストの広がりの中で眺めることにより、意味の質が変化していたり、わざと歪曲される様を「意味上、コンテキスト上の言葉遊び：チヨースーの言葉のゲーム」(“Semantic and Contextual Wordplay: Word Games in Chaucer”) と題して論じた。その中から、巡礼達の横顔をレポートした「ジェネラル・プロローグ」のコンテキストの中での“courtesy” (礼儀、礼節、よいマナー、雅びな、思いやりのある) の言葉遊びを取りあげて紹介する。

“courtesy” は冒頭の理想の型とされる騎士の描写で、「彼は騎士道、誠実、

名誉、寛大さ，“*curteisie*”（礼節）を重んじた」と他の徳目と並べられて気高い高邁な理想を表わす。

ところがこの“*courtesy*”も、彼とは対照的な息子の騎士見習いでは、「彼は“*curteis*”（礼儀正しく）、腰が低く、かいがいしく奉仕し、食卓では父の肉を切る役を務めた」と、彼の態度の慇懃さや気配り、食卓での礼儀に用いられ、騎士の高邁な理想からずいぶん離れてくる。このニュアンスの違いはそのまま親子のコントラストを映し出す。この食卓での肉切りという“*courtesy*”（礼儀作法）は、女子修道院長の描写の中で、テーブルマナーそのものに縮められてしまう。「指をソースにつけて濡らさぬよう、食物をこぼさないよう、“*curteisie*”（上品な食事作法）に専念することに最大の喜びを感じていた」と報告され、“*courtesy*”のニュアンスは高邁な理想から、騎士見習いの現実的な礼儀作法に、さらに社会上の義務である食事の作法にまで落ちてしまう。さらにまた、この言葉の転落への道は、托鉢修道士の「金づるになると見込んだ所では、彼は“*curteis*”（礼儀正しく）、腰が低かった」の描写でとどめをさされる。落ちるところまで落ちてしまったこの“*courtesy*”は偽善以外の何でもない。

“*courtesy*”という語の辿った変遷、しだいに品位を低めていった墮落への転落の人生は、チャーサーの操作した意味上、コンテキスト上の言葉遊びの一端といえると Wood は述べる。

このような言葉遊びの発する卑猥さ、それに抵抗する読者について発表した Sheila Delany の「抵抗する読者の解剖：中世文学並びにチャーサーの詩における性的な言葉遊びへの抵抗の意味」（“*Anatomy of the Resisting Reader: Some Implications of Resistance to Sexual Wordplay in Medieval Literature and the Poetry of Chaucer*”）をかいつまんで報告する。

彼女は、あまり卑猥な言葉遊びに夢中になりすぎると、本来のコンテキストの意味を見失ってしまう恐れがあると警告する Derek Brewer の例をあげて、チャーサー学者の中にもこういう卑猥な言葉遊びには抵抗を感ずる人達

がいることをあげる。

そういう人達の中に、テキスト *The Riverside Chaucer* の編集主幹である Larry D. Benson をあげる。

たとえば、『トロイラスとクリセイデ』の中で、捕虜の兵士と交換にギリシャ軍に連れてゆかれたクリセイデの留守宅を訪ねて、恋人のトロイラスは、次のように呟く。“O thow lanterne of which *queynt* is the light” 「ああ、光の消えうせた君の館の門燈よ」(下線、傍点筆者)。この“*queynt*”という語は、実は女性の性器の意味も内包しており、言葉遊びになっていて、クリセイデの性を、トロイラスを照らし暖めてくれた火とみるなら、消えた門燈とは、性の力が消えた場ととれるのだが、Benson は、この言葉遊びをテキストから抹消している。

卑猥な言葉遊びは、『トロイラスとクリセイデ』のような深い感情や美を描いた真面目な作品には相容れないということなのだろうが、中世の文人達にはこの種の審美感はなかった。卑猥な言葉遊びは、古来、高度な修辞技法のひとつで、中世では聴衆の注意をひきつけるため、説教や厳粛であるべき葬式の弔辞にさえ、言葉遊びがすまして顔を出した。街の通りには豚が走り廻っていたし、チョーサーの女子修道院長でさえ、テーブルマナーに気を使っても、食物を口に運ぶのはフォークでなく指である(もっとも当時は食事にフォークは使用しなかった)。さらに中世の教会建築にはグロテスクな彫刻や卑猥なステンドグラスや絵画が見られ、写本の文字飾りもしかり。この混沌とした、動物的で同時に精神的なものが共存する多次元の世界が中世だった。言葉遊びも捕えどころのない世界に属するもので、一次元的関係への挑戦状だと Delany は述べる。

現代の抵抗を感じる読者は、このような中世の感受性、モラルの基準に居心地の悪さを感じ、時に無防備の自分の心に侵入してくる卑猥な言葉遊びに、自分が必要以上に開放され、受身になり、抗しきれない、危いと感じ落ち着かなくなるのであり、いわば、女性的にされてしまう。抑圧と表現の接点か



ら生れる言葉遊び、もっとリラックスして楽しみなさいと申し上げたいと Delany は言葉を結ぶ。

H. Marshall Leicester は「粉屋は違いを作る：『粉屋の話』における性、競争、ノスタルジア」(“The Miller Makes a Difference: Gender, Competition and Nostalgia in the *Miller's Tale*”) で性の役割の転倒という観点からフェミニスト批評を展開した。

彼は「粉屋は違いを作る」という表題は、ジェンダー、つまり性の違いは、社会構造や文化によって作られるというフェミニストの理論に基づいて付けたもので、ジェンダー、性の意味、特にその用法の方向づけは、自然のものであるかのように教えられる前に言語や社会によって決定されるというのがフェミニストの根本理論だと前置きした上で、「粉屋の話」に入る。

「粉屋の話」におけるアリスンのジェンダー、つまり性の意味について彼は考える。アリスンの描写には男根崇拜の伝統的性の階級における、男の欲望の対象としての性が表現される。「腰の上のエプロン」、「ガードルのそばの財布」、「仔羊の毛より柔い」と粉屋は、彼女の“queynte”「隠し所」に手をやって求愛したニコラスと同様、彼女の身体の下から上へと好色な視線を投げてゆく。この視線は、やがてその対象の眼とぶつかり、「彼女は好色な眼つきをしていた」とアリスンの返えず視線が描かれる。

この欲望の対象としての描写は、性以前の母を追う乳児の子供っぽいイメージや、男性的な両性具有性とアンビバレントなバランスをとる。アリスンは、「母親についてゆく仔山羊や仔牛のようにスキップしたりふざけた」と描かれ、世話をしてやる性のない対象になる。この一面は、学生ニコラスなる下宿人と共に、自分の若い妻アリスンを家に残して留守にする年寄りの大工ジョンの、二人の浮気の絶好のチャンスへの無反応、無関心ぶりや、アリスンをノアの洪水から守ってやろうとするジョンの態度に反映される。彼女の両性具有性は、「帆柱のように背が高く」「石弓の矢のように真直ぐ」で、「楯のようなブローチを付けていた」の男性的なイメージによる描写に表わ

されている。

一般によく流布していた「間違っ場所の口づけ」のモチーフでは、伝統的にはその類話はすべてニコラスにあたる男性が最初お尻を出して、アブソロンにあたる男性の口づけを受けるのだが、それを粉屋はアリスンなる女性の役割に変えてしまう。

粉屋は、家父長制度の伝統的な女性の役割に違反することで、彼女に類話での伝統的な男性の役割を与え、両性具有性を強調する。その代りに彼女の正当な女性の役割を男性のアブソロンに移し変えるという芸当を企む。つまり、伝統的な性階級の境界を越えて、性の転倒の操作をはかる。

一方、逆に女性の性の役割をはめこまれた男性アブソロンは、ロマンスのお姫様の常套描写で表わされ、金髪の、おしゃれで気取屋の女性的な男性として登場する。そしてアリスンを対象に、貴婦人に捧げる愛の下僕として、騎士の間で流行したにせものの宮廷風恋愛を演じる。ニコラスと対照的に、このアブソロンは、アリスンを性的欲望の対象にして自分のものにすることに喜びを見いだすのではなくて、アリスンを恋するふりをして、実は、宮廷愛の儀式通り、踊りやスキップやセレナーデというパフォーマンスに自分を消耗させることに秘かな快感を感じている。

彼はアリスンの窓辺で「仔羊が母親の乳房を恋しがるように泣いてばかりいる」と自分の恋の病を訴える。念願叶ってやっと許して貰えたキスの場所が、なんと女のお尻と思ひあたって子供のように泣きじゃくる。この子供っぽいイメージには、ナルシスティックな、乳児の頃の、性が女性、男性に分かれる、性の分化以前の、周りの外の世界と自分との区別のつかない、自己と一体化した母親の愛に裏書きされた頃の乳児のイメージが重なる。周りの世界が全て自分の遊び道具になる乳児の頃の喜びへのノスタルジアが、アブソロンの気持にあり、この幻想は彼にとって宮廷愛以上の意味を帯びる。

復讐の鬼と化した彼の怒りは、アリスンへの失恋からではなくて、性が事実になる前に関連する、乳児の頃の快樂に訣別をつけさせられたことからき

ている。このノスタルジアは、語り手の粉屋自身の快感でもあり、社会の階級、規範への違反や競争、それから秩序からの逃避を意味する。男なのに女の役割を刻みこまれた女性的なアブソロンは、自分のジェンダー、性ゆえに罰を受ける。女のような男性アブソロンは、男の役割を負わされて、男のように行動するアリスンにより、自分の女性化を面前に突きつけられたのである。

粉屋は、この性の転倒した役割を、まるで何事もなかったかのように、最後には伝統的な正常な性の役割に戻す。復讐の鬼と化して、類話の筋書き通り、男性的に戻ったアブソロンは再び窓辺に来て求愛する。ちょうどその時、小用のついでにからかってやろうとして、アブソロンの面前で放屁したニコラスのお尻に、用意していた焼ごてをつきつける。

粉屋は、性の違い、性の階級への違反を操作してきたが、粉屋が本当に作りたかった違いは、社会階級への違反、つまり社会階級差という境界を踏み越えたいという「禁じられた欲望」を解き放ちたかったのである。話合戦で騎士の次に話をしようとして、宿の主人に「もっとましなお方に」と侮辱されて、騎士より「もっとましな」パフォーマンスで聴衆の拍手喝采を勝ち得、騎士を打ち負かしてやろうと挑戦する。この粉屋の野心は、社会階級、社会規範への造反と共謀の世界、つまり、性階級、性差の秩序への違反の世界を構築することによって満たされるというのが、Leicesterの心理分析的解釈によるフェミニスト批評である。

フェミニスト批評が出た所で、政治思想のテーマの分科会での発表ではあるが、その発表内容は、中世の結婚における夫婦の力関係、個人の個の自由の損失を扱ったRoberta Davidsonの「十四世紀における政治的に正しい結婚：チョーサーの『学僧の話』と『地主の話』(“Politically Correct Marriage in the Fourteenth Century: Chaucer’s Clerk’s and Franklin’s Tales”)について、「学僧の話」の所だけ、かいつまんで報告する。

中世の時代、王国と王の関係は、結婚と夫の關係に譬えられた。王国も結

婚も、国家や家族のような全体のために生きる公的義務を王や夫に要請し、個性、つまり自由や欲望を求める私的個人的な生き方を抑圧する。

「学僧の話」では、ウォルター侯は、政治的メタファである結婚において、このような制度に抵抗して、個人の意志、欲望を優先させようとするが、結局、失敗に終わる。

自由な独身生活を望む王、ウォルター侯は、国家存続のために、跡継ぎによる王の再生を望む国民の要請で、個人の意志を捨てて公的責任から譲歩する形で結婚の制度に組み込まれる。無政府的な国民の力に、王の權威が覆された結果と言える。

国民の中から選んだ村娘グリセルダとの夫婦関係は、王と国家の関係にあたる。夫婦の間で夫への服従を誓ったグリセルダの忍耐に感服したウォルター侯は、どこまで妻が忍耐できるか試してみたいという個人的欲望に駆り立てられ実行する。このような、正しい、あるべき夫婦関係への造反を、Davidson は「不貞」と呼んでいる。娘や息子の命を奪うと言って試しても、グリセルダは顔色ひとつ変えず、涙も見せず、夫に逆わない。とうとう命を奪うと伝えて実は親類に預けていた実の娘を呼んで、若い妻と再婚するから里に帰るようグリセルダに命令する。グリセルダは、心を全て夫に捧げてきたことに悔いはない。処女の代償として、せめて着て帰る普段着を一枚譲って下さいと頼む。ウォルター侯は「今着ているものを許す」との言葉を口にするや否や、その哀れさにいたたまれなくなり、急いでその場を立ち去る。

ウォルター侯の「不貞」、結婚の正しい関係への抵抗は、実の娘との関係をわざと読み違えて仕組んだ疑似結婚の妻の座、つまり、性的対象の座に実の娘を据えることにより、真の結婚を内部から解体しようとした時、頂点を極める。しかしこの彼個人の個の力、抵抗が崩壊しはじめるのもこの瞬間からである。

新しい嫁の感想を聞かれたグリセルダは長いスピーチの中で、「今度はこの優しいお姫様を、もう一人の女におやりになったように、お苦しめになら

ないで下さい。貧しい中に育てられた者と違って、お育ちの良いお方は、そのような苦しみには堪えられないものでございます」と堰を切ったように、思いのたけを吐露する。ウォルター侯は「いや、もうたくさんだ」と妻の変らぬ忍耐強い貞節の前に哀れを催したと描写される。この哀れを催すという言葉は、彼はすっかり悔いている気持をも含むと指摘されている。

このウォルター侯の結婚の公的義務への抵抗、公的關係に対して個人の個を押し通してきた力を覆すほどのグリセルダのスピーチのパワーは逆説的ではあるが、夫の絶えまない抑圧により培われた力で、さすがのウォルター侯も、妻を沈黙させるのがやっとだった。ウォルター侯の結婚の公的關係を破壊する力は、グリセルダという正当化された結婚の殉教者により逆に崩壊されるのである。

ウォルター侯は、妻の忍耐を試したいという個人的欲望から仕組んだ真相の全てを話す。新しい花嫁とその弟が、実は死んだはずの自分の娘と息子とわかり、ハッピーエンディングが約束されたとたん、グリセルダの力は糸が切れたように失われ、何度も泣き崩れ気絶する。

結婚という公的關係の中で、個人の権威や力は、しばしば女性に脅かされ、女性は混沌とした無政府状態を起こす可能性を秘め、その潜在的な力は夫に触発され、また再び鎮圧されるのである。ウォルター侯が、結婚・王国のメタファによる究極の選択を避けることのできた唯一の道は、結婚も支配も決してしないこと、つまり王国と結婚の両方の状態に付随する力を捨てること、グリセルダのように無力さを通して力強くなることを意味する。

このような制度においては、殉教は、自分の自由とは引き合わない代価だということを男は時に発見すると Davidson は締めくくる。

この「新チョーサー学会」では、様々な、異質な歴史的、文化的背景からの視点が新しい解釈を生みだしているのに新鮮な感動を覚えた。

この私の感動は、東洋の背景を持つ私達日本人の「日本のチョーサー研究」と題する分科会に集った世界の学者達にもそっくりあてはまるものだったに

違くない。

安東伸介氏は、日本のチャーサー研究の歴史について論ぜられ、英語史を専門とするフィロロジーにより先鞭を付けられた研究は、現代では文学批評でも多彩な研究が盛んであると述べられた。松田隆美氏は、中世の終末観について、死後の地獄落ちへの伝統的恐怖と死への打算的で実用主義的な態度がアンビバレントに、共存していたと論ぜられた。高田康成氏は、ダンテの『神曲』をパロディにした『名声の館』について述べられ、ダンテの「見しこと」、つまり「祝福の国」はチャーサーでは「夢見しこと」つまり『名声の館』のこととなり、ダンテの「永遠性と全体性」の視座が、チャーサーでは地上的にパロディ化され、距離を置いて扱われていると発表された。高田氏は、この発表が「岡日八目」を実証することになればよいと言葉を結ばれたが、西洋文明のアウトサイダーである日本人学者達の発表は皆、世界のチャーサー学者達に深い感銘を与えたことは疑いない。

筆者が参加した分科会では、発表の後、活発な論議が交され、質疑応答というよりは、談論といってよく、その場のほとんどの者が気楽に話し合う井戸端会議の趣きがあった。そこから、重要な共同研究の企画が生まれることもしばしば見受けられた。したがって、個人個人が研究の先陣争いを競うというより、むしろ、チャーサー学という共通の旗印の下で、世界の研究者達が協力しあって、チャーサー学の礎を共に築いていこうとする姿勢が伝わってきた。

この遠い中世の世界へのノスタルジアと興味が、過去と現代を結び、さらにチャーサー研究という共通目標の下で世界の学者達が共同プロジェクトを組んでいるのを目のあたりにして、まさに「チャーサーは世界を結ぶ」、平和へのひとつの国際友好の形を見た思いがした。

世界の学者達との交流の中で、あちこちから日本的視点からのチャーサー研究への興味と熱い期待が寄せられたことを記しておく。

注

- 1 本稿は、1989年10月29日に同志社大学今出川キャンパスで開催された「1989年度同志社大学英文学会年次大会及び総会」で発表した講演「初めて国際学会に出席して—チョーサーの場合」の一部を修正変更してまとめたものである。講演依頼を受けた時、講演でとりあげるチョーサー学者達に発表内容を報告してよいかどうか問い合わせたところ、快諾して下さり、資料までたくさん送っていただいた。この世界的に著名な学者達の気さくなご厚意に感謝したい。